

アメリカ聾教育におけるトータル・コミュニケーションの検討 (1)

——二言語使用について——

草薙 進郎*

本研究では、アメリカ聾教育における「二言語使用」について取り上げ、その主張、理論、方法論、問題点を解明、考察した。二言語使用の議論は1970年代初期より見られたことが確認された。二言語使用主張の根拠は、① アメリカ手話言語が聾児にとって母国語である、② それによって概念、意味、内容を中心とした教育を行い認知能力を高める、③ 聾者の尊厳、文化などを尊重すべきである、などにあった。方法的には、手話言語から英語への移行を考え、二段階習得を想定している。問題点として、① 聴覚・音声様式の発達、② 二言語使用の言語環境、③ アメリカ手話言語の有効性、について検討した。

キーワード：アメリサン 二言語使用 手話言語 トータル・コミュニケーション

1 序言

アメリカ聾教育において1960年代末にトータル・コミュニケーションが台頭し、その後アメリカのみならず世界各国に急速に普及、展開していった。トータル・コミュニケーションでは、聾児のコミュニケーションを成立させるために、あらゆるコミュニケーション手段を用いることの必要性が強調された。つまり、口話、聴能、手指のコミュニケーション様式を統合して、聾児のコミュニケーションを確実に成立させようと思図した。

当初のカリフォルニア、サンタ・アナ学区とそれに続くメリーランド聾学校における実際指導の方法論は、口話と手指（手話と指文字）の同時使用または併用にあった。口話との同時使用または併用ということからの当然の帰結として、手話、指文字は口話英語に対応して用いられた。コミュニケーションの様式は、口話、聴能、手指と異なるが「使われている言語」という視点からみれば、英語という「一言語」である。つまり「一言語二様式」と言ってよいだろう。この英語対応の手話方式として、SEE₁、SEE₂、Signed Englishなどが1970年代初期に創案され、実際場面に導入、使用

されてきた¹⁾。

こうした動向に対して、ギャローデット大学のStokoe, W.C.らによるアメリカ手話言語の研究が、1950年代後半に生じ、その後手話言語研究が急速に進展をみせてきた²⁾。こうした研究の成果や成人聾者の自分達自身の言語、文化に対する意識の高揚、社会におけるマイノリティに対する意識変革などが、アメリカ手話言語を独自の一つの言語として成立させ、手話に対する従来の社会、教育の分野における蔑視、偏見の払拭に力を貸してきた。こうした影響の一つとして、聾教育において、とくに聾幼児の段階から、アメリカ手話言語を導入して教育をしていこうとする「二言語使用」、つまりアメリカ手話言語と英語の二言語使用の主張が生起してきた。

本稿では、二言語使用は、アメリカ手話言語と英語というそれぞれ独自の言語体系を有する二つの言語を、聴覚障害児の言語獲得にいかにも有効に使用していくかということに関係して取り上げられる。手話、指文字を英語に対応させて用いる「手指英語」は、アメリカ手話言語（わが国では伝統的手話に相当）とは異質のものである。手指英語は、英語に手指様式を対応させて用いるもの（わが国では同時法的手話に相当）であり、あくまで英語と結合したものである。聴覚障害児の二言語

* 心身障害学系

使用においては、発達の早期における口話英語獲得の困難性という理由から、後にみるように第一言語としてのアメリカ手話言語の獲得から手指英語または口話英語への移行、展開が意図されている。本稿では、聴覚障害児の言語獲得期における二言語使用の問題に焦点が置かれている。

1985年のイギリス、マンチェスターでの聴覚障害教育国際会議の発表においても、デンマーク、スウェーデン、フランスなどにおける二言語使用の主張、実践がみられ、最近聾教育における二言語使用に対する関心が高まりをみせつつある³⁾。本稿は、アメリカ聾教育における二言語使用の提唱とその理論、方法論、問題点について解明、考察していくことを目的としている。このことは、今後の聾教育におけるコミュニケーション方法を検討していく上で無視できない問題であると考えられる。

2 二言語使用とトータル・コミュニケーション

1960年代末に台頭したトータル・コミュニケーションにおける手指の使用は「手指英語」と言われる「英語に対応した手指の併用」として位置づけられる。その淵源は「方法の共通性」という観点から辿れば、直接的には1940年代中期のギャロドット大学の同時法に行き着く⁴⁾。1970年代、1980年代のトータル・コミュニケーションの展開の中で主流を占めてきたのは、SEE₂などに代表される手話方式の「口話英語との同時使用」にあったことは事実である。つまり、口話英語に手話方式を同時に併用することによって、コミュニケーションを確実に成立させようと意図した点に特徴がある。

これに対しアメリカ手話言語を第一言語として用い、後に第二言語として英語を教えるという二言語使用のアメリカ聾学校教育における実践は、20世紀に入ってからは、トータル・コミュニケーションの台頭まで正式には存在しなかった。また台頭後においても、ケンダル校のCokely, D.R.ら(1974)が「最近聾学校に入学している殆どの子(両親聾者の聾児は例外だが)は、アメスランを知らない。なぜならば、① 殆どの場合両親や教師はアメスランの有効なモデルとなるスキルを欠いている、② 殆どの聾学校において圧力は、英語をモデルとすることで、アメスランをモデルと

することではないから。」と述べているような状況が続いてきたと言える⁵⁾。

その後状況の変化はみられるものの、現在でも聾学校の正式な方針として本格的に実践が開始されているという情報はみあたらない⁶⁾。

しかし、① 1950年代後半のギャロドット大学Stokoeらによるアメリカ手話言語の先駆的研究とその後の研究の発展、② トータル・コミュニケーションのアメリカ聾教育における急速な展開、③ 一般教育における二言語使用教育の展開(1968年「二言語使用教育法」成立)、④ 聾幼児の言語獲得についての研究の進展、などが、聾教育における二言語使用の主張の生起をもたらしたと考えられる。こうした現状から、将来二言語使用の実践化という方向で、アメリカ手話言語の発達段階における早期導入の志向がさらに高まることが予想される。

3 二言語使用に関する議論の生起

1960年代末のトータル・コミュニケーションの台頭のあと、1970年代に入ると早くも聾教育におけるアメリカ手話言語の使用に関しての議論が生起してくる。

Fant, L.J. (1972)は「もし子どもがアメスランを使うならば英語学習を妨害するという仮定のもとに殆どの聾学校では、幼い聾児にアメスランを教えない。これは大変論議を呼ぶ問題である。ところが、これらの学校は、子どもが12歳位になるとSiglishを使う。」と聾教育におけるアメスランの導入について問題を提起する。Fantは、Siglishは英語とアメスランを混合する試みであり、語順が英語で文法的手話言語を使用するものであると説明している⁷⁾。

Bergman, E. (1972)も、アメリカ手話言語での教育方法が幼稚部、初等部で開始されるならば、何が生じるかをみることは大変興味があるが、この問題はあまりに論議を呼ぶものである、と述べている⁸⁾。

会議においても、この問題についての議論がみられる。1972年2月29日～3月3日にテネシー州であった、聾者援助団体協議会の第5回全国討論会における分科会「言語とコミュニケーション」の様子について、Bowe, F.は「言語がどのように最初に聾児に提供されるべきかについて、激しい討論がみられた。ある者は手話言語が可能な限り

早く導入されるべきだと感じている。他の者はより洗練された方式、多分手指英語が必要であると思っている。」と報告している。「会議を通じていろいろなグループが、手話言語またはトータル・コミュニケーションが今やますます学校で容認されつつあることに喜びと信念を繰り返し表わした」ことも事実であったが、二言語使用としてのアメリカ手話言語の早期導入を図るのか、一言語二様式としての手指英語を発展させていくべきかについて、激しい議論があったことが、Boweの報告から確認できる⁹⁾。

同じくLloyd, G.T.は、分科会「コミュニケーション方法」の報告の中で、初めは家庭などで聾児のコミュニケーション様式としてアメリサンを用いて、子どもが自然に言語を学ぶようにし、後に学校で教師が正式な手指英語を導入し教えるのがよい、とする主張があると述べ、しかし「アメリサンが最初に聾児に受容される第一次の言語形式であるべきであるとする提案には、感情が優先している一方、そのようなアプローチは実際に有効であるかどうかということが、問題として正されねばならない。問題の一つはアメリサンは手指英語よりも優先するということを示すデータを、いまだ我々は持たないということである。」と指摘している¹⁰⁾。

以上のような記述から、トータル・コミュニケーション台頭直後の1970年代初期から二言語使用教育の問題が、関係者の間で議論を呼び始めていたことが確認できる。

4 二言語使用の主張

1) Kannapellの二言語使用の見解

こうした時期に二言語使用について発表された本格的な論文として、1974年のKannapell, B.M.の「聾教育における新しい方向：二言語使用」がある¹¹⁾。

Kannapellはギャローデット大学のBornstein, H.らとSigned English (聾幼児用に関与された手話方式, 1973) のテキスト作成作業の中で、他の聾者とコミュニケーションするとき相互に用いるアメリカ手話言語を、なぜそれ自身言語とみなさないのかという点に疑問をもった。

彼女はアメリカ手話言語は、① 多くの記号を有し、② 聾者に共通して理解され、③ シンタックスを有する、という点から、それを独自の言語

としてみなすことに同意する。そして、アメリカ手話言語の現状について、① 正式な場面では英語が用いられASLは非公式な場面で用いられている、② 両者を用いているある者たちは、英語はASLより優れていると考えている。③ クラス場面ではASLは正式に使われていない、④ 言語としては英語が教えられASLは学校で言語として教えられていない、⑤ 手指英語については標準化の努力がみられるがASLについては手話が収集、分析されていない、⑥ 歴史的には聾者の社会は言語的に安定していたが、聾学校での手指英語が聾者の社会に影響を及ぼしつつあると思われる、などと分析している。

とくに、聾学校の健聴教師、健聴両親などの英語を優先しASLを低位にみる態度によって聾児が、① ASLは英語より劣っている、② 社会において英語を話す健聴児より自分は劣っている、③ (もし聾であれば) 自分の両親は社会において英語を話す人より劣っている、④ 両親が健聴であれば自分は親より劣っている、というような考えを持つのは当然なことである、と指摘している。

さて、Kannapellは発達の早期段階よりの二言語使用の根拠をどう考え、どう主張しているのだろうか。次にこの点を要約してみよう。

(1) 一般に英語以外の言語(スペイン語など)を話す子の学習の最善の手段は、とくに学校での早期段階においては、彼らの母国語が優位な言語であることが研究で示されてきた。聾児についても同様に、学習の最善の手段は、彼らの母国語が優位な言語、つまりASLであると考えられる。

(2) 二言語使用児は一つの指示物(reference)に二つのことばを有する。つまり彼らの注意は、語ではなく考えに、シンボルよりもむしろ意味に、そして形式よりも内容に向けられる。そして、この現象は知的プロセスにおいて大変重要である。また、二言語使用児は、一言語使用の友達よりも認知的に弾力的であることが見出されている。それ故、ASLと英語を用いて二言語使用として聾児を扱うことが、この子らにとって有利であるように思える。このやり方で我々は、彼らの自然な視覚能力を確立し、知的、認知的スキルをより十分発展させることができるだろう。

(3) トータル・コミュニケーションはASLなしでは不完全である。しかし、ASLは聾学校におい

て排除されている。多くの聾教育者は教室内でASLを使うことは不可能であると考えている。その理由は、① ASLは英語ではなく英語より劣っており、概念の点で不明確である、② 健聴者はASLを学ぶのが難しく時間がかかる、という点にある。ASLはFantらの作業を通して言語として教えられ始めつつあり、健聴両親はASLを第二言語として学ぶ必要がある。聾者の言語の否定は彼らの文化や歴史の否定を伴う。

以上のことからKannapellは、次のようなASLと英語の二言語使用を提唱する。

(1) 聾教育者はASLと英語の文法的、意味的差異を理解すべきである。

(2) 聾児は常にASLは価値があり、素晴らしいものであると感じるように助長されるべきである。

(3) 聾児は英語を学ぶことを望まねばならない。

(4) 学校は聾と健聴の両方の教師をもつべきである。聾者教師はASLを子どもに教えるであろう。

(5) もし概念を英語で提示するならば、同じ日に前もってその概念をASLで提示しておくのが有効である。

(6) どんな場面か、どんな役割を果たすか、ということに応じて、子どもの二言語使用の程度は異なっていく。

(7) 学校に入る聾幼児は、クラスで雰囲気になれるまではまず母国語(ASL)で指導され、その後英語が導入される。

(8) 聾児は早期のASLの使用とASLの文脈での英語導入によって利益を得るであろう。

最後にKannapellは結論として「視覚言語(手指英語)の形式が導入されたとき、聾児は著しく進歩するということは今日までの研究が明らかにしてきている。ASLを受け入れその使用を開始すれば、つまり聾児が二言語使用者として扱われれば、その成果はさらに増大することは明らかであると確信する。」と結んでいる。

後の論文(1980)で、彼女は「我々は聾児を聾と健聴の二つの社会に備えさせるために、教育における二言語的、二文化的方法を発展させる必要がある。」と主張している。しかし、現状は「不幸にもASL研究者と聾教育者、聾者の社会のメンバーとの間に連携が欠けている。」ので、将来はASL研究者も二言語使用、二文化的な聾教育の促進に努力することを期待する、と述べている¹²⁾。

2) その他の二言語使用の主張

前述したKannapellの論文が発表された後、アメリカ手話言語の早期導入を意図する二言語使用教育の問題について、いくつかの論文が発表されてきた。次にこれらの論文について検討したい。

まず、聾児の尊厳、権利、文化を重視した立場からの主張がみられる。

カリフォルニア大学ノースリッジ校のFant, L. J. (1974)は「トータル・コミュニケーションの運動は口話主義の束縛から我々を自由に解き放ちつつある。しかし、私はそれが口話主義を他の重苦しい束縛：英語獲得への過度な強調に置き換えつつあることを恐れる。」と危惧している。Fantはトータル・コミュニケーションの概念とその自由な方式を評価しつつも、コミュニケーション方式にアメスランを含まねばならないと考え、「アメスランは聾児を全くの訓練から守る。それは教育に対する聾児の権利を保障する。」と主張する。

Fantがアメスランの教授を提唱する理由は、次の諸点にある。

(1) アメスランを認めることは、聾者の尊厳、価値、ユニークさを認めることを意味する。聾者が健聴者の行動に近似することに価値を置く考えは否定されねばならない。

(2) アメスランの使用に子どもは誇りをもつようにしていくべきである。このことが、子どもにとって英語の発達に努力する動機づけとなる。また子どもに自尊心、自信をもたらすことになる。

(3) 成人が尊敬の心をもってアメスランを体系的に教えれば、子どもは喜んで自分の言語(自分のグラウンド)で、学習に取り組み、他の学習領域にも転移するだろう。

Fantはアメスランで教育を開始し、まもなくアメスランを扱うようになった子が、手指英語へと移行していくと考えている。しかし「英語を教えるためにアメスランをいかに用いたらよいか、私の知る限りだれも真剣にそれを試みてこなかった。過去150年間我々専門家がこうした努力に全く関心を示してこなかったことは奇妙なことである。」と指摘し、アメスランの文法のテキストブックがあれば、それによって英語教授の方法を開発する実験が開始できると述べている¹³⁾。

二言語使用の根拠として、Newman, L. (1973)は手指コミュニケーションが聾児の母国語である点を挙げている。このコミュニケーション方法は

他のコミュニケーション方法よりも視覚的に確実性をもつからと指摘している。Newmanは、トータル・コミュニケーションにおける手話方式とその成果を評価しつつも、アメリカ手話言語を第一言語として受け入れることのメリットと教育的意義を力説する¹⁴⁾。

オースチン聾学校長のStevens, R. (1980)は、二言語使用と二文化教育を主張する。手話言語は聾者の唯一のコミュニケーション方式であり、手話言語の抑圧は子どもから言語と文化を奪うものであると考える。Stevensはトータル・コミュニケーションの導入のもたらしたものは、言語世界での手話言語の地位を高めた点に大きな意義があるとしながら「不幸にもクラスへの手指コミュニケーション（手指英語）の導入は、指導の内容または形式の面で変化をもたらさなかった。手指コミュニケーションは単に言語としてよりも、教授法としてみられている。」と評価している。

不幸にも聾教育の専門家社会では、アメリカ手話言語は言語として認められていないが、幼稚部、小学部レベルでアメリカ手話言語を第一言語として用い情報、概念を伝えるようにし、中学部以上の青年期に第二言語として英語の文法を教え、英語を獲得させていくことをStevensは提唱している。しかしこれは「時として実体がない、不完全な主張である。」と自ら認めている¹⁵⁾。

次に、ASLの言語的特性に着目した主張がみられる。

ノース・イースタン大学のLane, H. (1985)はASLを二言語使用教育法が適用されるところの少数派言語のリストの一つに挙げられると考えている。彼のASL導入の根拠は子どもは常に自分にとって「流暢な言語」によって最も良く教育されるという点にある。子どもが豊かな発展しつつあるコミュニケーションの世界を最初から持っていれば、教育の成功は教師にとってさらに素晴らしいものになるだろうと指摘する。LaneはこのASLを第一言語としてその基礎の上に英語の能力を育てること、さらにより論理的な分野で教育手段として英語を使い始めることの必要性を提起する。そうした結果について次のように予想する。「生徒にとって最も流暢な言語であるアメリカ手話言語で教えられるクラスを設ける以上に、価値ある実験を想像することはとても困難であると私は考える。我々はこれらの生徒が英語と読みの学習を含

めて達成するであろうものを見て、ショックを受けようであろうと信じる¹⁶⁾。」

さらに、ASLによる認知・思考の発達に着目した主張がみられる。

ラガーディア大学のLivingston, S. (1986)は意味を創造し共有する経験をアメリカ手話言語によって保障し、思考と学習の基本的能力をクラス内で育てる実践の可能性を解明しようと試みている。Livingstonは聾児の言語発達プロセスも健聴児と同じく自然なプロセスを迎えようとする。そして、まず人間相互の依存的プロセスにおける意味の創造と意味の共有の経験をアメリカ手話言語によって豊かに与え、英語の読み書き能力の獲得を図っていこうと意図している¹⁷⁾。

前述の論文の第2部としてニューヨーク大学のBrannon, L.ら(1986)は、早期導入による意味の創造と意味の共有の経験を通して読み書きの経験を豊かにし、英語を獲得させていくという二言語使用を主張している。彼らは次のように説明する。

ASLは聾児にとって意味を最も良く代表すると思われる言語方式である。それをを用いてクラス内で内容中心の思考、学習の機会が与えられれば、彼らの心は言語的に代表された経験で満たされ、意味のやりとりに参加する能力がさらに上達する。自分達自身でそうした経験を新しく作り出していくことによって、(一方では素地となる知識の獲得によって)初めて聾児は読み書きを学ぶ準備ができる。自然な言語獲得アプローチによるASLの習得によって、聾児が自己の世界について理解し、概念を発達させ、教師や親との相互依存的プロセス(意味を創造し意味を共有するプロセス)を通して、読み書きの基礎を形成していくことを目指す。

英語能力は、絵物語、ストーリーを用いた場面の助けを借りて意味を理解、表現するところの発達的な読み書き活動(ストーリーの筋を覚える、物語からのアイデアを表現する、繰り返し読む、自分の経験を表現する、など)を基礎として獲得されると考える。その際に子どもが読み書きの中で出会う意味を明確にするために、ASLが文脈の補助の一部として使われると示唆している¹⁸⁾。

北イリノイ大学のLuetke-Stahlman, B. (1986)は、二言語使用(ASLと英語)と二様式使用(口話と手指の様式)が聾児の英語(とくに読み書き)の能力獲得に有効であると述べている。

彼女は、ASL, SEE₂, キュード・スピーチ, 聴覚・口話英語などを第一言語と考え、第二言語である英語の読み書きへの移行プログラムを想定する。この際に両親、教師が少数派の第一言語に否定的態度を示すことが聴覚障害児の成績に悪影響を及ぼすと指摘している。また、「言語基礎の未熟な聴覚障害児が強力な第一言語を形成する言語スキルを獲得するにつれて、彼らは概念を内容にマッチさせ、言語形式を意味にマッチさせ、様々な文脈の中で第一言語を使用する機会を持たねばならない。」と述べ、言語促進者としての教師の役割を重視している。

結論として、Luetke-Stahlmanは一般の二言語使用教育の実践と研究を参考しつつ、教師、両親は聴覚障害児の英語の読み書き能力の開発方法の究明を、二言語使用・二様式使用によって開始しなければならないと強調する。

この論文は① 第一言語をASLに限定していないことから、二言語使用の概念に混乱がある、② 二様式使用は主に手指英語を指しているとすれば、第一言語から第二言語への移行プログラムという方略は、むしろ口話英語から書記英語への移行と考えられ、異なる言語間の移行とは解釈できない、など疑問点が残る。こうした点はみられるが、二言語使用と二様式使用が、それぞれ聴覚障害児の英語の読み書き能力の促進に有効である、とする主張そのものは、それとして成立するであろう¹⁹⁾。

なお、Luetke-Stahlmanはこれより前の論文(1982)においても、一般教育における二言語使用教育の成果から学んで、すべての聴覚障害児に手話言語による教育を行う必要があると主張している。このことは、聴覚障害児の認知、学習的言語能力と基本的相互コミュニケーション・スキルの学習に否定的な結果をもたらす原因とはならないだろうと述べている²⁰⁾。

3) 二言語使用主張の根拠

以上みてきたように、アメリカ聾教育におけるアメリカ手話言語と英語の二言語使用の問題提起は、1970年代初期に生じたことが確認された。その後、関係する論文がいくつか発表されてきたが、二言語使用の提唱の根拠は、次のように要約できるであろう。

(1) 聾児の学習の最善の手段は、彼らにとって母国語であるアメリカ手話言語である。アメリカ

手話言語は、コミュニケーションの上で視覚的に確実性を有する。

(2) アメリカ手話言語によって意味、思考、概念、情報、内容に中心を置いた教育を行ない、養われた知的、認知的スキルを基礎として、英語を獲得させていく。

(3) 聾者の言語(アメリカ手話言語)の否定は彼らの文化や歴史、さらには聾者自身の存在、尊厳、価値などの否定を意味する。聾者が健聴者の行動に近似することに価値を置く考えは否定されねばならない。健聴両親、健聴教師はアメリカ手話言語を学ぶ必要がある。トータル・コミュニケーションは、アメリカ手話言語なしには不完全である。

(4) 子どもがアメリカ手話言語の体系的使用に誇りを持つようになれば、英語学習の動機づけとなるし、その成果が他の学習領域にも転移するだろう。

(5) 子どもは常に自分にとって「流暢な言語」によって最も良く教育されるので、アメリカ手話言語を聾児に教える必要がある。聾児は豊かな成長しつつあるコミュニケーションの世界を最初から有していなければならない。

(6) アメリカ手話言語の使用による早期からの聾児と親、教師などとの場面、文脈の助けを借りた意味の創造と共有の経験が、英語の読み書き能力の開発に有効な働きをする。

(7) 一般教育における二言語使用教育の成果を学んで、聴覚障害教育においてアメリカ手話言語と英語の二言語使用を考えていくべきである。

以上に要約された根拠の上に、二言語使用教育の実験的試行を期待する意見がみられた。

4 全体的考察

アメリカ手話言語は、殆どの成人聾者の間で用いられている独自の言語である。1817年創設のハートフォード校では、フランスから移入された手話法が修正されて用いられた。1860年代の口話教育の台頭とその後の発展とともに、20世紀に入ってからには聾学校教育の実践場面では手話そのものが抑圧され、アメリカ手話言語による教育の実体は正式には存在しなかったし、現在も正式に存在しているという情報はえていない。こうしたことから、ここでの考察は二言語使用の理論、方法論の妥当性、有効性についての検討が中心とな

る。

第一に問題となるのは、アメリカ手話言語による認知、思考面での発達を優先し、それを基礎にその後の英語獲得を図るという点である。つまり英語発達における「二段階習得」を設定し、アメリカ手話言語から英語への「移行」を理論としている点である。

このことの根拠として、一般教育におけるスペイン語から英語へという二言語使用教育の成果を引き合いに出す。この場合は、聴覚音声様式上の移行であるが、アメリカ手話言語から英語への移行は視覚運動様式から聴覚音声様式への移行である点に異質なものと考える。手指英語の場合は口話英語と対応して同時使用される、つまり一言語二様式であるが、アメリカ手話言語は独自の言語であり、口話英語とその一致、対応は考えていない。従って大脳発達の生理学的な知見からみて、0～3歳期という最適期における聴覚能力の獲得とスピーチにおける発声・発音器官の運動的習熟の機会が失われた場合、後にこれを修復することは大変困難であると考えねばならない。

また、アメリカ手話言語による認知能力を基礎として読み書きによる英語獲得を図ることは不可能ではないにしても、口話能力が読み書き能力の獲得の基礎として有効性を発揮することは、従来の口話教育が実証している内容である。手指英語の場合は早期よりの英語に対応した手話方式の口話英語との同時使用を基本としているので、この点はアメリカ手話言語の場合とは区別して考えねばならない。

二言語使用の方法論として、① アメリカ手話言語から英語への移行の時期はいつごろを想定しているのか、② 英語への移行というとき、それは口話英語を意味するのか、手指英語を指すのか、③ 移行の方法はいかなるものか、④ 移行後の二言語使用の実際をどう考えるのか、⑤ 手指英語とアメリカ手話言語の関係はどうあるべきなのか、などアメリカ手話言語による教育実践が正式に存在しない現状から、さらに検討しなければならない問題が数多くあると言わねばならない。

第二の問題は言語の自然な発達を考えた場合、健聴両親や健聴教師がアメリカ手話言語を乳幼児とのコミュニケーションにおいて十分使用できる能力を獲得できるかという点にある。このことは不可能ではないにしても、かなりの努力を要求す

る困難な作業であると予想される。こうしたことから成人聾者の役割、聾者教師の役割の重要性が提起されてくるわけである。聾者教師の役割は、コミュニケーションに限らず正当に評価されねばならないが、乳幼児期の教師がアメリカ手話言語に堪能な聾者教師で占められたとしても、健聴の親の問題などを考えたときアメリカ手話言語による自然な言語環境の問題がすべて解決されるとは考えられないだろう。教育はコミュニケーションのみで成立するわけではなく、聾者教師の役割と共に健聴教師の役割も当然考える必要があるだろう。

第三にアメリカ手話言語の有効性についての問題がある。二言語使用の効果を示すデータとして、両親聾者の聾児の家庭での早期からのアメリカ手話言語の使用の事例が取り上げられる。こうした家庭での親子のアメリカ手話言語によるコミュニケーションの成立が基礎となって、その後の口話学習を妨害することもなく英語学習への移行をもたらす、言語能力、学力、心理適応の面などに有効な働きをすることが従来の研究で示されてきた。

こうした家庭での手話使用が、アメリカ手話言語優位なのか、Siglishなのか、手指英語に近いのか明確でない点もあるが、ともかく聾児の10%における事例での研究データが、はたして他の90%を占めるアメリカ手話言語を知らない健聴両親に生まれた聾児にそのまま適用可能かという問題もある。二言語使用の主張者が指摘するようにこの問題は単にアメリカ手話言語のスキルの問題だけでなく、聾者の社会、文化、尊厳をどう見るのか、聾児が将来どんな人間に育ってほしいのか、どういふ社会で生きていってほしいのか、というような理念的問題にも関係してくる。

以上指摘してきたような問題はあるにしても、二言語使用を主張する重要な根拠とされる、早期アメリカ手話言語の導入による、聾乳幼児にとっての自然な言語獲得のプロセス、およびアメリカ手話言語による、認知、思考、概念、意味の早期形成と発達は、理論的に全く机上の空論として排除、否定されるべきものではないであろう。二言語使用の支持者は、聾教育における二言語使用教育理論の妥当性、理論の具体化の条件、実際的な計画、具体的な方法、教育成果の評価、などについてさらに検討していく必要があるであろう。

当面の残された研究課題として、① 早期よりのアメリカ手話言語導入の事例研究の検討、②

手指英語使用の側からの二言語使用教育批判, ③
二言語使用の側からの手指英語使用批判, などについて, さらに検討していきたいと考えている。

注

- 1) 草薙進郎・上野益雄編著 (1983): アメリカ聾教育における手指方式の検討. 筑波大学, 49P.
- 2) アメリカ手話言語 (American Sign Language) は, アメスラン (Ameslan, 短縮形) またはASL (省略形) と表記される。本稿では, 原著者の表記を用いるようにし, それ以外は「アメリカ手話言語」を用いるようにした。
- 3) 草薙進郎 (1985): マンチェスター大会とトータル・コミュニケーション. 聴覚障害, 40 (10), 10-12.
- 4) 草薙進郎 (1988): アメリカ聾教育におけるトータル・コミュニケーション台頭要因の研究. 筑波大学, 232-238.
- 5) Cokely, D.R. & Gawlik, R. (1974): Options II; Childrenese as Pidgin. Deaf American, April, 5.
- 6) カリフォルニア大学ノースリッジ校留学から帰国した岡本正純氏によれば, 正式にアメリカ手話言語を導入して, 二言語使用教育を実施している聾学校はなく, 2~3の聾学校で試行的に個人が実施しているようである (1989年8月)。
- 7) Fant, L.J.(1972): An Introduction to American Sign Language. Joyce Media Inc., iii-iv.
- 8) Bergman, E. (1972): Autonomous and Unique Features of American Sign Language. Amer. Ann. Deaf, Feb., 24.
- 9) Bowe, F. (1972): V. Language and Communication. In Proceedings of National Forum V Council of Organizations Serving the Deaf, 39.
- 10) Lloyd, G.T. (1972): X. Communication Methods. Ibid., 64-65.
- 11) Kannapell, B.M. (1974): Bilingualism; A New Direction in the Education of the Deaf. Deaf American, June, 9-15.
上記の論文は, 同じタイトルの1973年6月の論文 (53P.) を発展させたものである。著者は聾者で, 両親聾者に生まれたので, アメリカ手話言語のネイティブ・スピーカーである。ギャローデット大学を卒業し, アメリカ・カソリック大学でM.A.を取得, ジョージタウン大学で言語学を勉強中。ギャローデット大学の研究助手の経験あり。
- 12) Kannapell, B.M. (1980): Personal Awareness and Advocacy in the Deaf Community. In Baker, C. & Battison, R. (eds.) Sign Language and the Deaf Community. N.A. D., 115-116.
- 13) Fant, L.J. (1974): Why Ameslan? California News, 89 (7), 1-3, 16.
- 14) Newman, L. (1973): Bilingual Education. Deaf American, May, 12-13.
- 15) Stevens, R. (1980): Education in Schools for the Deaf Children. In Baker, C. & Battison, R. (eds.) op. cit., 177-191.
- 16) Language in the Key (An Interview with Harlan Lane) Gallaudet Today, 1985 Fall, 2-8.
- 17) Livingston, S. (1986): An Alternative View of Education for Deaf Children; Part I. Amer. Ann. Deaf., March, 21-25.
- 18) Brannon, L. & Livingston, S. (1986): An Alternative View of Education for the Deaf Children; Part II. Amer. Ann. Deaf., July, 229-231.
- 19) Luetke-Stahlman, B. (1986): Building a Language Base in Hearing-Impaired Students. Amer Ann. Deaf., July, 220-228.
- 20) Luetke-Stahlman, B. (1982): A Philosophy for Assessing the Language Proficiency of Hearing-Impaired Students to Promote English Literacy. Amer. Ann. Deaf., December, 844-851.

Summary

Analysis of Total Communication in Education of the Deaf in U.S.A. (1) —Bilingualism—

Shinro Kusanagi

Recently in Sweden, Denmark, France and other countries educators of the deaf have been implementing bilingual education. Interest in bilingualism is growing more and more in education of the deaf in the world.

The purpose of this study was to clarify and discuss the theory, methodology and problems of bilingualism in education of the deaf in U.S.A..

The results of present study were as follows:

- 1 . Argument about bilingualism originated early 1970's.
- 2 . Advocates of bilingualism argued that American Sign Language was the mother tongue for the deaf children. They aimed to attain cognitive ability and learning ability through the concept and content based education by using American Sign Language. They believed the dignity and culture of the deaf people should be respected and valued.
- 3 . In methodology advocates of biligualism designed plan of transfer from American Sign Language to manual English in certain developmental period and they desired deaf children to learn both American Sign Language and English.

In conclusion the author discussed problems of bilingual education from the points of (1) providing natural language environment in home and school, (2) switching from visuall-motor modality to auditory-vocal modality in later developmental period, (3) certain effects of bilingual education.

Key word : Ameslan Bilingualism sign language Total Communication